近畿大学教職教育部の６年間を振り返って

梅　田　和　子*

（UMEDA Kazuko）

１．はじめに

私は、福岡県北九州市の出身ですが、大阪府で教員として働いていた大学時代の友人のお姉さんとの出会いで教職をめざすことになり、大学卒業後、大阪府の公立高校で講師として教員生活をスタートしました。採用試験は幾度かチャレンジしましたが合格できず、幸いなことに、私立の中学校高等学校で正規教員として雇用していただきましたが、その職も、母の看病のため退職し、九州に帰りました。母の体調が良くなり、再度、大阪府の公立高校で講師をしながら採用試験に合格、教諭から教頭、大阪府教育委員会事務局勤務、校長を経て、近畿大学に着任しました。定年退職後に、大学での教員養成に関われることや直接学生を指導できる喜びはとても大きなものがありましたが、果たして私に務まるのだろうかと不安で一杯だった近畿大学での教員生活も間もなく終わろうとしています。ここでは、教職教育部での６年間、何を大切に学生を指導してきたのか、振り返って書いてみたいと思います。

２．本学での６年間

⑴　授業での指導を通して

①　教職入門

「教職入門」の授業では、これまで児童生徒の立場で見ていた教育について、教育とは何か、教育に携わる教師は子どもの成長にどのような役割を果たさなくてはいけないか等、受講生が主体的に考えようとする姿勢が身につくよう、私のこれまでの経験も交えながら、思いを込めて語ってきました。授業の最後には教職に対する見方や考え方を確認するため、毎回小レポートを提出させました。小レポートは、採点して返却したので、受講人数が多いときは、採点に追われ大変だったこともありましたが、回を追うごとに文章を書く力がついてくるのを実感し、そのことをやりがいに続けてきました。次の授業では、よく書けている小レポートを理由と共

＊近畿大学教職教育部特任教授

に紹介し、それらに触れることで、次はより良い小レポートを書こうという意識付けにつなげるようにしました。小レポートは授業の最後15分程度で作成し提出させていましたが、オンライン授業になってからは、提出締め切りを翌々日にしたので、自分で調べるなど内容の充実した小レポートが多く見られるようになりました。今年度の授業は、１回目のみ対面授業で、その後はオンラインでの授業になりましたが、最終授業アンケートの結果から、７割を超える学生が、この講義を通して、教職へ就こうとする意志がより強くなったと回答してくれたことは、昨今、教師を敬遠する学生が増えつつある中、とても嬉しく思います。

②　教育実習指導

「教育実習指導」の授業では、次年度に迫った教育実習に必要な基礎的な知識の確認や心構え等についての講義、担当する教科の学習指導案の作成、それをもとにした模擬授業とともに、学級（ホームルーム）活動等での模擬スピーチを行ってもらい、受講者どうしの講評の時間を取りました。年度や曜日によって、受講人数にばらつきがあり、人数が多いときは、１人当たり、８分程度の模擬授業しか実施できない年度もありましたが、全受講生に模擬授業と模擬スピーチをさせることで、３年時点での課題をしっかり認識させ、教育実習までに改善できるよう、アドバイスを行いました。令和２年度の授業からは、オンライン授業になったことから、授業者の学習指導案の内容を事前に確認し評価した上で、模擬授業を観察する形態に変更しました。そうしたことで、より模擬授業を集中して観察でき、しっかりした学習指導案が作成出来ていることが良い授業につながることを実感し、学習指導案の作成の意義の理解にもつながったのではないかと思います。ただ、受講生は、事前に学習指導案の評価、授業が終われば、模擬授業の評価を提出しないといけないため、課題に追われ、大変だったようですが、オンライン授業になったことで、学生により深く学ばせることができたのではないかと思います。

③　総合的な学習の時間・特別活動論

「総合的な学習の時間・特別活動論」の授業では、「特別活動」と「総合的な学習の時間」の意義・内容・指導の在り方・評価・実践上の留意点などを、学習指導要領、実践例などを題材に、授業を行いました。また、学級担任になった際に活用できるアイスブレイクやワーク等の体験を出来るだけ取り入れるようにしました。学生は、「特別活動」や「総合的な学習の時間」と言われても、児童生徒の時代に何をしていたのかぼんやりとしか覚えていなかったり、また、

学校によっては、本来の趣旨に沿っていないと考えられる状態で行われていたりと、授業の開始時には、これらの時間の存在意義を感じていなかった学生が多々見られましたので、受講生同士で、自分が児童生徒だった時の印象に残っている活動内容を交流させたり、優れた実践をしている学校の事例を紹介し、子どもたちの変容に気づかせることで、「特別活動」や「総合的な学習の時間」に大きな意義があることを気づけるように授業を実施しました。授業最後の振り返りでは、「充実した学校生活があったのは、担任の先生方が自分たちの見えない所で、いろいろなことを考えてくれたのだと分かって感謝の気持ちを持った」「これらの時間が、子どもたちに学習指導だけでは身につきにくい社会で求められる多くの力を育むことに大きな意味があり、決しておろそかにしてはいけない領域であることを学んだ」等の意見がありました。

④　生徒指導の理論及び方法（農学部）

「生徒指導の理論及び方法」の授業では、学校現場で起きている様々な生徒指導上の事例を踏まえながら、どのように指導すればいいのかを考えさせ、指導力を身につけることを目標に授業を行いました。受講学生は、農学部食品栄養学科の学生で、管理栄養士として、食育及び学校給食指導に対する理解も必要なので、それらの内容も授業に含めました。特に、事例の検討では、一人一人に意見を述べてもらったり、グループでの話し合い活動を実施しました。授業最後の振り返りでは、「一人で思いつかない方法や視点を知ったことで『チーム学校』の重要性を学んだ」「様々な事例への対応を考える中で、教師としてのあるべき姿を考えるようになった」等の意見がありました。

⑤　教職実践演習（農学部）

「教職実践演習」の受講生は、教職ナビ所属の学生以外は初めて出会う学生でしたが、４年生の後期でもあり、また、教職をとっていることもあり、主体的に意欲的に授業に参加してくれたと思います。ただ、卒業後、教職に就かない学生の方が多く、授業の取り組みに消極的な学生もおり、その点はやや残念な思いがあります。

⑵　教員採用試験対策指導について

教職教育部では、教員採用試験の合格に向けての指導が、年間を通して組織的に計画的に実施されており、とても感心しました。教師になりたいと強く願う学生を、一人でも多く学校現

場に送りたいという思いで、教員採用試験対策指導にあたってきました。私の面接指導は、学生からは、厳しく、講評でも問題点をズバズバ指摘すると思われていたようです。面接指導を通して、自分自身の考えを整理し、教育観や指導観を確立していってほしいとの考えから、最初の回答に対してどんどん切り込んでいく質問をしていったので、ぼんやりとしか考えていなかったり、どこかの面接問題集にある答えを引っぱってきて回答していたりするのでは、答えられなくなったからではないかと思います。私は、面接指導後の講評も結構長かったのですが、「講評から教育に大切なことを学んだ」「自分が教壇に立つ際、どのような姿勢でいるべきかを学んだ」とコメントを寄せてくれた学生もいます。また、講評の中で、私自身の経験を話しながら、自分自身の教育観や指導観に改めて気づくこともあり、それを授業に還元していくことも出来ました。

１年目に指導した教職ナビ12期の学生で、とても印象深い学生がいます。その学生には、何度も面接練習をすることになり、同じ質問ばかりするわけにいかず、面接官役としても質問項目を考えるのが大変でしたが、何を聞いてもしっかり答えるのです。その学生に何故そんなにどんな質問にもしっかり答えられるか聞いたところ、早い時期の面接指導で答えられない質問があり、どんな質問にも答えられるようになるまで、面接練習はしないで、まずは勉強をしようと決め、そこから面接練習に臨んだとのことでした。因みに、この学生は、現役で教員採用試験に合格し、現在、高校の教員として頑張っています。私は機会あるごとに、教員採用試験の受験生には、この学生のエピソードを話し、「面接練習は量も大事、でも質にこだわれ」と、面接指導を通して、基本的な知識を持つこと、それをもとに自分の考えの軸を確立していくことの重要性を伝えてきました。

⑶　教職ナビの活動支援について

近畿大学教職教育部の一つの強みが、教員志望の学生が自主運営するサークルである「教職ナビ」の存在であると思います。４月から近畿大学に採用されることが内定し、クリスマスの日に、前教職教育部長の田中先生に連絡をさせていただいた所、合宿中であるとうかがいました。その合宿の内容が、２泊３日のスケジュールで、教員採用試験に向けての面接指導、勉強会、レクリエーション等であること、しかもその合宿にはすでに教員採用試験を終えた４年生が参加し、先生方と一緒に指導をしていると伺って、そのような取り組みをされていることに大変驚きました。この「教職ナビ」という組織や取り組みは、他の教員養成に取り組んでいる

大学からも話を聞かせてほしいと来られたり、面接練習に参加させてほしいと依頼を受けたりしましたが、素晴らしいシステムで自分の大学でも作ってみたいと評価の言葉をいただきました。教職ナビの創設に関しては、石川俊一先生の「教職支援活動における『教職ナビ』の存在について」（近畿大学教育論叢30周年記念号）を読ませて頂くと、石川先生をはじめとした当時の先生方のご尽力、当時の学生が教員採用試験突破の目標のために自主的・主体的に活動を進めていったことがうかがえます。また、教職ナビの結成により、近畿大学の教員採用試験の合格者は飛躍的に増えていったとも書かれています。

「教職ナビ」は学生の自主サークルですが、教職教育部の教員のサポートも受けながら、様々な活動を行っており、特に、私は、顧問的な立場で教職ナビの活動を見守ってきました。私が関わったこの６年間の中で、様々な教員採用試験対策講座へのナビ生の参加状況をみると、やらされ感のようなものを感じている学生がいるのではないかと気になっています。また、昨年度からオンライン授業になり、これまでのように、上級生が自身の経験を後輩に伝えるなどの学生同士が対面で関われる機会が減り、繋がりが希薄になっていることも気になるところです。教職ナビも創設から17年がたちました。改めて、原点に帰って、「教職ナビ」の存在意義を考えさせることで、より自主的・主体的に活動に取り組んでいってくれることを期待したいと思います。

３．終わりに

文部科学省の調査によると、全国の公立学校教員採用試験の平均選考倍率は、平成12年度（平成11年度実施）教員採用試験の13.3倍をピークに年々下がってきています。その理由として、合格者数がほぼ変わらない中、受験者数が減少傾向にあることがあげられています。受験者数の減少の一因には、教員の長時間労働があるのではないかと思います。OECD 国際教員指導環境調査（TALIS）2018でも「小中学校ともに、日本の教員の１週間当たりの仕事時間の合計は、参加国の中で最長」との結果が報告されています。コロナ禍にあって、さらに、学校ではやらねばならないことが増えていると現場の先生方から聞いています。是非とも、国には、教員の長時間労働の解消につながる実効的な策を講じてほしいと思います。そうでなければ、教師になりたいと思う学生が、教職から逃げていくことになるのではないでしょうか。

そして、近畿大学教職教育部には、今後も、「人に愛される教師、信頼される教師、尊敬される教師」の養成に尽力され、わが国の次世代を担う素晴らしい教員を一人でも多く輩出され

ることを願っています。

最後になりましたが、近畿大学の６年間は、授業で出会った学生や教職ナビの学生たちから多くのエネルギーをもらい、非常にやりがいを持って仕事をさせていただくことができました。近畿大学教職教育部で働かせていただいたことに深く感謝申し上げます。

そして、教職教育部の先生方、大学院・共通教育学生センターの皆様、本当にお世話になりました。ありがとうございました。